

ホテルのラウンジという場所はどのようにしてこんなに「きちんとした大人」を演じさせようとするのだろう。今日は人生初めてのお見合いだからなおさらだ。二十五年分の人生経験を総動員して、私は澄ました顔で紅茶のカップを口元へ運んだ。

祖母が友人と「結婚の予定がなさそうな孫たちを一度会わせてみましょうよ」と盛り上がった結果、今日のお見合いが決まった。

二人でお茶するだけでもいいからと言われたものの、最初は余計なおせっかいだと思っていた。でも、相手のプロフィールを紹介された瞬間、文句を言う気はきれいさっぱり失せていた。岩倉清貴。三十歳。私立高校の体育教師。間違いない。岩倉先生だ。

「星野？」

ああ、この懐かしい声。ゆっくり目線を上げ、意識して優雅に微笑む。背の高い男性が呆然と立ち尽くしていた。日頃から体を動かしていることが一目でわかる引き締まった体は、今日はトレードマークの黒いジャージじゃなくてパリッとしたネイビーのスーツに包まれている。あの頃だったら、式典の時にしか見られなかった、貴重な姿だ。

「お久しぶりです、岩倉先生」

「——大変申し訳ないのですが、ご縁がなかったということでは」

「そんなあ！　いらしたばかりじゃないですか」

くると踵を返そうとした彼を慌てて引き留めると、先生は硬い声で言葉が続けた。

「教え子と見合いはマズいだろ」

「元、ですよ」

「元でもだ」

「とりあえずお座りください、スタッフさん困ってますよ？」

そう促すと、先生は少し迷った後、しぶしぶというように座席に腰を下ろした。黒縁眼鏡の奥からこちらを射抜く眼光は記憶よりもずっと鋭く、眉間の皺もあの頃よりいくぶん深い。岩倉先生は女子生徒に対してはなぜかぶっきらぼうで、近寄りがたい空気を持っていたけれど、教え方が驚くほど丁寧だし、たまに見せる笑顔が尊すぎると、私を含む一部の女子たちの間では絶大な人気を誇っていた。

「私のこと、覚えていてくださったんですね」

「覚えてるに決まってるだろ。お前ほど鈍臭……教え甲斐のある生徒、そういないからな」

「もうちょっと言いい方工夫できませんか？」

「根性があるって褒め言葉だよ」

そう言って、先生は昔と同じように少しだけ口角を上げて笑った。声も、表情も、あの頃と変わっていない。一瞬で二十五歳の私から、先生を見上げる女子高生に戻ってしまう。

「先生の授業大好きでした」

「そうか？ 新任一年目で余裕がなくて、頭でっかちな授業だっただろ」

「ううん。先生の丁寧な説明があったから、運動音痴の私でもコツさえ掴めばできるかもって思えたんですよ」

一生健康でいるために、まずは体を動かすことを好きになってほしい。

最初の授業で語った通り、先生の授業は運動が得意でない生徒も絶対に置いてけぼりにされなかった。説明は常に論理的で、どの筋肉をどう使えばいいのかみたいのに、運動神経という言葉で片付けられがちな動作を誰もが分かるように丁寧に分解してくれた。そのおかげで、私の体育への苦手意識は自然と消えていったのは間違いない。

「先生に教わったストレッチ、今でも毎晩やっています」

息を吐くたび、体を伸ばすたび、先生の顔を思い浮かべている。そんなこと、さすがに口にはできるはずもない。それでも、「先生のおかげで、運動が大好きになりました」と伝えると、先生の目元にうつすらと涙が浮かんでいた。

「そうかあ……あの星野が……」

眼鏡をはずしてスーツのポケットから取り出したハンカチでゴシゴシと目を拭う。少し乱暴なその仕草は、体育祭や卒業式で何度も見てきた、懐かしい姿だった。

「相変わらず涙もういんですねえ」

「教師はみんなそうなんだよ」

ハンカチをしまった先生は「お前と話せてよかった」と微笑んだ。

「教え子と飲むっていいもんだな——紅茶だけだな」

言い終えると同時に、先生は静かにカップを置いた。さっきまでの穏やかさがどこかに行き、視線も口元もここに來た時の険しい表情に戻る。

「ばあさんには俺から断っとく。『昔の教え子だった』って言えばさすがに諦めるだろう」
「……断ってほしくないです」

先生をまっすぐ見つめる。あの日、飛んできたバスケットボールから庇ってもらった瞬間から、私は岩倉先生に恋をしていた。風のように駆け寄って盾になってくれた頼もしい背中。ボールをキャッチした大きな手。「大丈夫か!？」と私の顔を覗き込んだあの必死な表情——誰にも話せない想いは卒業アルバムと一緒に大切にしまった。でも、男と女として、大人同

士として、お見合い相手として再会できたのなら話は別だ。いつか結婚するなら先生みたいな人がいいなあと夢見ていた私に降ってわいた、一世一代の大チャンスを逃す手はない。

「私は、先生のことが大好きなので、このお話をどんどん進めて欲しいです」

「……ただの錯覚だよ。お前なら、もっといい男と出会える」

「卒業してから七年経ったけど、先生より素敵な男性はいません」

「俺は教師だぞ」

「元、ですよ」

「教師は現役だよ」

テーブルを挟んで睨み合う。このままでは話はずっと平行線だ。それなら作戦変更。正面突破はやめるしかない。

「先生、今でも甘い物はお好きですか？」

話題を急に変えたため、「何を言い出すんだ」という怪訝そうな視線が返ってくる。

「このラウンジのケーキ、すごく美味しいんですって。苺を最高に美味しく食べるために作られたショートケーキも、この季節しか食べられない新栗のモンブランも、とーっても評判がいいんですって」

先生の眉がぴくりと動いた。バレンタインデーの贈り物を全て断っていた岩倉先生が有名店のチョコレートだけ一瞬迷ったらしい、という可愛い噂が女子の間で囁かれていた。女の子は、そういうところを見逃さない。

「ケーキ一つ分の時間だけ、私に頂けませんか？ 私を売り込ませてください」

「……お前、今何の仕事してるんだっけ？」

「スポーツメーカーの営業です。結構成績いいんですよ」

会社名を伝えると「うちの部でも使ってるわ」と先生は目を丸くした。

「この仕事を選んだのも先生の影響なんですよ。私も、運動を楽しんでくれる人を一人でも増やしたいなって」

しばらく沈黙が続いてから、先生は観念したようにメニューへ視線を落とした。

「……ケーキ一個だけだからな」

さあ、勝負はここからだ。私は先生が教えてくれた「一生使える正しい姿勢」を再現するために、背筋をぴんと伸ばした。



そして私は、いかに自分が優良物件で教員の妻としての心構えが万全かを、就職活動のとき以上に熱を込めてアピールした。

何とか連絡先を交換した後は、正面からのアタックと水面下での根回しを同時進行で進めた。祖母経由で先生のご家族も味方につけ、着々と外堀を埋めていった三か月後、「お前の熱意には勝てねえわ」という言葉と共にめでたく婚約にこぎつけた。両家の顔合わせも終え、結婚式の日取りも決まり、私は胸を張って先生の婚約者と言えるだろう。

(なのに、どうしてこそこそ隠れなきゃいけないんだろう……)

「おい、不貞腐れんなよ」

「不貞腐れてません」

「天気のこととは仕方ないだろ」

先生は、私が曇り空に文句をつけていると思っている。確かに、晴れていれば灯台から富士山が綺麗に見えたはずだった。でも、拗ねてる理由はそうじゃない。

数時間前、わざわざドライブデートで隣の県に来たのに、偶然先生が受け持っている女子

生徒二人組に遭遇してしまった。私は咄嗟に離れて他人のふりをしたけど、先生は、逃げる暇もなく彼女たちに囲まれてしまった。

「岩倉先生、ほんとに一人で来たのー？」

「絶対彼女と一緒にでしょ！」

「ノーコメント」

「婚約者と来ているんだ」とは、言ってくれなかった。先生は結婚するまで私の存在を表に出さないつもりなので仕方がない。恋人がいることがバレたせいで、一週間授業にならないくらい冷やかされ続けた同僚の二の舞になりたくないらしい。理由はわかってる。それでも、胸のあたりがずっとざらついている。

女の子たちのことを思い出す。眩しいくらいに若くて、きらきらしていた。彼女たちも、あの頃の私みたいに、岩倉先生のこと好きなのかもしれない。それか、今日で好きになってもおかしくない。学校から遠く離れた場所で、最高にかっこいい私服姿の先生と偶然出会ったら、運命を感じてしまうだろう。

「……可愛い子たちでしたね」

胸元を斜めに横切るシートベルトをぎゅっと握る。平静を装ったつもりだったけど、つい

棘のある声が出た。先生は運動席で小さく肩をすくめた。

「まあな、教え子はみんな可愛いよ」

「じゃあ、私も可愛いですか？」

何を聞いているんだろう。口が勝手に動いた瞬間、ああ子どもっぽいな、と自分で思った。

「お前も可愛いよ」

すぐさま返ってきたのは、拍子抜けするほどあっさりした肯定だった。だからこそ、確認せずにはいられなかった。

「それは教え子として？ それとも女の子として？」

「……ノーコメント」

ノーコメント、先生の口癖だ。都合の悪い話題になると必ずそれで線を引く。友人たちと体育教室に押しかけて、「先生の好みのタイプってどんな子ですか？」なんて聞いてはぐらかされていたあの頃と、何も変わっていない。

「……やっぱり、私って魅力ないんですかね」

ぽつぽつと降り始めた雨が、サイドガラスに不規則な模様を描いている。

「どうしてそうなるんだ」

「だって全然手出してもらえないし。手も繋いだことないし」

先生は言葉を失ったように黙り込んだ。「ノーコメント」は出てこない。車内に重たい沈黙が広がる。

先に口を開いたのは、私だった。

「……今日は、帰りたくないです」

「……は？」

「帰りたくないです。先生ともっと一緒にいたいです」

押さえ込んでいた気持ち、堰を切ったみたいに溢れ出す。

「ずっと我慢して、離れて歩いて、やっと隣にいられるようになったのに……もうバイバイなんてさみしい……」

次の言葉が続かなくて、きゅっと唇を噛んだ。雨が強くなってきた。ワイパーが忙しく動いているのを、涙で滲むようにぼやけた視界で見つめる。

「……帰りたくないって言うけど、どこ行くんだよ」

「ふたりきりになれる場所に行きたいです」

あそことか、と遠くに見える派手な建物を指差す。海沿いの静かな街の景観を壊すように

きなり現れた西洋風のお城は、シヨッキングピンクにライトアップされて夜の闇に浮かび上がっている。先生は呆れたようにため息をついた。

「……婚前交渉はよくない」

短く、きっぱり言われる。それでも、引く気にはなれなかった。

「私はいいと思います。結婚前に相性を確かめるのって大事……って言うじゃないですか。今どき、普通のことですよ」

「お前……」

先生が、ぎゅっとハンドルを握りしめた。雨に濡れたフロントガラスの向こうを睨むように見つめながら、いつもよりも低い声が返ってくる。

「そういう経験、あるのか？」

「ないです」

男性とお付き合いをしたことはあるけど、ラブホテルに行くようなことをする関係になることはなかった。先生は少しほっとしたように短く息を吐いた。

「だったら、結婚するまで大事に取っておけ」

「取っておいても、先生にあげるんだから同じですよ」

初めてを捧げたい相手は一人しかない。それなら、結婚式の後にするのも今するのも大差はないはずだ。先生の横顔をちらりと伺うと、耳の先がわずかに赤く染まっていた。あら、と思う。これは、行けるかもしれない。

「先生が嫌なら、無理には言いません。でも私は、岩倉先生に触れてほしいんです」

私は息を詰めたまま、先生の反応を待った。先生は前を向いたまま、眼鏡の位置を直した。その仕草は、私の誘いをどう断るべきか、考えているように見えた。

「……お前が期待してるようなことを、俺はしてやれないと思う」

頑なな声。けれど、ハンドルを握る指先がわずかに震えているのを私は見逃さなかった。

「どうしてですか？ 私はこんなに先生のことが好きなのに」

「お前、さっき経験がないって言っただろ」

「言いましたね」

「——俺もなんだよ」

一瞬、思考がフリーズした。経験がない。つまり、それって——

「先生、童貞なんですか!？」

「おい！ 嫁入り前の娘がデカイ声で言う言葉じゃないぞ！」

「すみません」

慌てて口を塞ぐと、先生は深い溜息をついた。

「そんな暇なかったんだよ。高校と大学は部活と教職で、教師になってからは部活の顧問に授業の準備……引いてるだろ。三十にもなって童貞かよって」

「引いてません。むしろ逆です」

「……嘘つけ」

「嬉しいです。先生の初めてが貰えるなんて」

本心だった。引け目を感じている先生には申し訳ないけれど、私にとってはこれ以上ないほどの加点要素でしかない。誰よりも真面目に、全力で目の前のことに向き合ってきた証拠だ。その不器用なまでの堅物ぶりが、どれほど希少で価値があるものか、先生自身は分かっている。魅力がないなんてありえない。むしろ、逆にすごくえっちだと思う。

「さっき先生が『星野が処女でよかった』って思ってくれたのと同じです。私も『先生が童貞でよかった』って、本気で思ってます。好きな人の初めての相手になれるのって、すごく光栄なことですよ」

私の言葉に、先生はすぐには返事をしなかった。ハンドルを握る指に、さっきよりも力が

こもっている。否定でも拒絶でもない沈黙が、車内に落ちる。

「ねえ、先生。一緒にお勉強しませんか？」

「勉強……？」

「はい。保健体育の、もっと……実践的なやつ」

高校時代、男女別で行われたあの授業を思い出す。私たち女子生徒が女性の先生から話を聞いている間、先生はきつと男子生徒たちを相手に「そういうこと」について教えていたはずだ。

「……お前、よくそんなこと平気で言えるな」

苦笑するように呟いた先生は、それ以上何も言わずにウィンカーを出した。車が向きを変えた先には、きつと、あのピカピカ光るお城が待っている

順番にシャワーを浴びた後、二人でベッドの上で向かい合って座る。先生はバスローブをきちんと着込んでいるけど、襟元の隙間から分厚い胸板がちらりと覗いている。しっかりと生地の上からでも分かる、肩や腕の男らしいライン。その布の下にある体を想像してしまつて、喉の奥がほんの少し渴いたような気持ちになった。

「おい、これ読んどけ」

私の欲望にまみれた視線に気づいていない訳がないのに、先生はそれに触れる素振りすら見せず、静かにスマートフォンを渡してきた。

「それで、乙のところの空欄にサインしろ。指でいいから」

「なんなんですか、これ」

「性的同意書だよ」

画面の中には「甲および乙は、双方が自由意思に基づき、強制・脅迫・誤解なく、対等な立場で親密な身体的接触を行うことに同意します」「甲および乙は、理由を問わず、いつでも同意を撤回できるものとし、相手方はこれを直ちに尊重します」等の堅苦しい文章が並んでいた。一番最後に甲乙それぞれの名前を記入する欄がある。

「ちゃんと同意を取れって生徒に指導してるんだ、教師がやらない訳にはいかないだろ」

「……そうですね」

眼鏡の奥から向けられる真剣な眼差しに、思わず背筋が伸びる。先生が堅物なのは分かっていたけれど、まさかここまで真面目だとは思っていなかった。

指先で自分の名前を記入し、先生にスマートフォンを返す。続いて先生が記入する。画面を覗き込むと先生の大きな字と私のへによつとした字が並んでいるのがおかしかった。

「先生、宜しくお願いします」

「お、おう」

ぎこちなく頭を下げ合ったあと、視線がぶつかってそのまま動けなくなる。沈黙が痛い。先生は決まりが悪そうに頬をぽりぽりと掻いた。

「こういうのって、どう始めるもんなんだ……？」

私も経験豊富なんて嘘でも言えないけれど、ここはリードしなければいけない場面な気がして、頭の中にある「大人の知識」を必死に繋ぎ合わせる。

「えっと……最初は、軽めのスキンシップから……だと思えます。たとえば……手を繋ぐとか」

「手……」

再び沈黙が落ちる。そつと顔を覗き込むと、先生の瞳には戸惑いと、隠しきれない熱が入り混じっていた。

「大丈夫ですか？ 岩倉先生、女の子と手を繋いだことってあります？」

「バカにするなよ。さすがにそれくらいはある」

むつとしたような声が返ってくる。その反応がどこか微笑ましくて、私の緊張が少しだけ甘い期待に変わった。

「……手、触ってもいいか？」

いつもの誠実な声。だけど、わずかに震えている気がして、私はそつと両手を差し出した。

「はい……どうぞ」

ゆっくり伸びてきた大きな掌が、私の手を守るように包み込む。温かくて、ちょっとだけ汗ばんでいる。

「先生の手、あったかい……」

「お前の手が冷たいんだよ」

先生は、私の指を一本ずつ丁寧に検分するように取り上げ、ゆっくりとマッサージを始めた。根元から指先へ、節々をなぞりながら指が螺旋を描くようにくるくる滑っていく。

「こうすると毛細血管が拡張して血流がよくなるから、家でもやってみろ」

人差し指、中指、薬指——触られているのは指先だけなのに、体全体が熱く火照ってくる。

「あっ……♡　せんせ、せんせ、気持ちいい……♡」

「お前なあ……変な声出すなよ……」

「だってえ……♡　あっ、痛っ！　いたたたっ、センセ、そこ無理、痛いってばあ！」

親指の付け根、肉の厚い部分をぐり、と深く押し込まれた瞬間、私はベッドの上で足をバタバタさせて悶絶した。

「暴れるなよ。ここは合谷と言って、あらゆる不調に効くツボだ」

「そういうのいいからあっ！　ほんつとに痛いんですっ！」

「大げさなんだよ。……ほら、ゆっくり呼吸しろ」

指を離されたあとも、押されていた場所にジンジンとした熱い余韻が居座っている。解放された安心感もあるのかもしれないけど、あんなに痛かったのにちよつと気持ちよかったような気もしてきた。おかしい。私はマゾではないはずなのに。

「肩とか背中に触れてもいいか？　こっちも凝ってるだろ」

「いちいち確認しなくても、いいんですけどおっ……♡」

「しつこいくらい確認しろって言ってるんだよ、生徒には」

ある程度は流れや勢いに身を任せてしまってもいい気がするけれど、先生は「正しい手順」を守るつもりらしい。

ベッドにうつ伏せに横たわると、先生は私の腰を跨ぐようにしてベッドに両膝をついた。体重はかかっているのに、両脚で挟まれる体勢はまるで逃げ道を塞がれているようで、背筋がぞくりと震える。

「力、抜いとけよ」

大きな手がバスローブに越しに肩を包み込む。指先が生地越しに沈み込み、皮膚の下を確かめるように動く。やがて凝り固まった筋肉を探り当てると、そこにじんわり圧をかけた。

「ガチガチになってる。仕事忙しいって言ってたもんな」

「ん……新商品出たので、頑張ってるんですよ……」

親指でぐっと肩甲骨の際を押し込まれ、思わず喉の奥から声が漏れる。

「力加減大丈夫か？ 痛くないか？」

「……ちょ、ちようどいいです……♡　　せんせ、きもちい……♡」

「だから、エロい声出すなって」

耳元で低く笑われ、くすぐったさに身をよじる。プロの施術みたいに気持ちいいんだから、声が出てしまうのは仕方がない。体の強張りがほぐれて、意識までふわふわと頼りなくなっていく。

（待って、これじゃあマッサージで終わっちゃわない？）

先生の手が心地よすぎて、このままだと本当に眠ってしまいそう。せつかくラブホテルまで来たのに、このまま熟睡してしまつて夜が終わるなんて、あんまりすぎる。

「……先生！」

脱力感を気合で振り払い、勢いよく首だけで振り返る。センセがわずかに眉を跳ね上げた。

「どうした、星野」

「キス、してもいいでしょうか！」

一瞬、時間が止まったような静寂。次の瞬間、センセは盛大に噴き出した。

「お前なあ……！ 元気良すぎだろ！ 俺が言えたことじゃないけど、もうちょつとムードってもんがなあ……！」

「確認取れって言ったの先生じゃないですかあ！ 私だって、どうしていいか分からないんです！」

先生は肩を震わせて笑ってから、ふっと目元をやわらげた。

「いや、まあ、たしかに……そうだよな」

先生は独り言のように呟くと、私を抱き起こした。腕の中にすっぽり収まった状態で至近距離で見つめられ、心臓がうるさいくらいに騒ぎだす。

「……星野。キス、してもいいか？」

私はこくりと頷いて、そっと目を閉じた。

かすかな衣擦れの音と一緒に先生の気配が近づいてきて、一瞬だけ唇が重なり、すぐに離れていった。目を開くと、先生は顔を真っ赤にして片手で口元を覆っていた。

「やわらけえ……」

先生は、自分の唇に触れたものの正体が信じられないといった様子で、呆然と私を見つめていた。

（もしかして、キスも初めてなのかな……？）

その可能性に気づいた瞬間、胸の奥がキュンと甘く疼いた。先生のファーストキス、貰っちゃった。

「もう一回いいか？」

ほんのわずかに甘さの混じる掠れた声。こくと頷くと再び唇が重なった。今度も一瞬触れるだけですぐに軽い音を立てて離れていく。

「なあ、もう一回……」

「先生、もう確認しなくて大丈夫ですよ」

私はそつと彼の熱い頬に手を添えて、自分から顔を耳元へと寄せた。シャンプーと石鹸の香りの奥にある、先生自身の肌の匂いがふわりと鼻をくすぐる。私はそれを胸いっぱい吸い込みながら、熱い吐息を直接、耳の奥へと吹き込んだ。「やめて欲しかったらやだつて言うので、好きなだけキスしてください」

私の吐息が、先生の肩をびくりと震わせる。可愛い。楽しい。大好きな人が、自分の言葉や動きでこんなに揺らいでくれるのって、最高に愛おしい。

「いいのか？」

「いいですよ」

先生の手が私の肩に触れる。そのまま引き寄せられ、視界が先生の顔でいっぱいになる。ふと、先生が眼鏡をかけたままということに気づいた。ずっと軽いキスをしていたから気づかなかった。こういうことをする時って、眼鏡はいつ外せばいいのだろう。眼鏡をかけた

先生も好きだから、もうしばらくこのままでいて欲しくもあるけれど。

お互いの呼吸が混ざり合う距離でしばらく見つめ合う。やがて、顔が更に近づいて、優しい口付けが落ちてきた。

ちゅ、ちゅ……♡

軽く吸い付くような音が静かな部屋に響く。私は意を決して、舌先をほんの少しだけ伸ばし、先生の唇をぺろつと舐めた。その瞬間、肩に添えられていた先生の指にぐっと力がこもった。驚かせてしまったかと不安になったが、すぐに先生の唇が動いて、応えるように舌が出てきた。ぬるりとしたやわらかい感触が、静かにふれあう。

ちよん、ちよんと。まるで挨拶みたいに舌同士が触れ合う。まだディープキスとは呼べないかもしれない。それでも、私の頭の中は、先生とのキスでいっぱいになっていた。

「せんせ、キス上手ですねえ……♡」

とろけた声で囁くと、先生の瞳の奥に、暗く熱い光が灯った。初めて見る、男の人っぽい表情だ。しまった、と思う。何かよくないことを言ったんだろうか。

「誰と比べてるんだよ」

「え、えーと……」

誰かと比べたつもりはなかった。でも、大学時代に一瞬だけ付き合った元彼としたキスよりずっとずっと気持ち良かったのは確かだ。言葉に詰まって視線を泳がせた瞬間、ぐいっと引き寄せられた。

「えっ……ちよっ！　ん、んんーっ！」

ちゅっ♡　ちゅ、ちゅぷっ♡　ちゅ、ん、じゅっじゅっ♡　ぬぷ、じゅるるっ♡♡

激しく唇が重なる。さっきまでの優しさが嘘だったかのように、分厚い舌が私の口の中を蹂躪していく。むさぼるように、長く、深く。息をする暇もないほど、唇を奪われ、舌を絡め取られて、奥まで吸い上げられる。

「んっ……ふ、う……♡　せん、せ……っ♡　いき、できなあ……」

息を吸う余裕もない。甘い声が漏れて、頭の中が真っ白になる。体からふわっと力が抜けて、先生にしがみついているなければ、もう意識を保ってられない。

ようやく唇が離れたあと、先生はこつんと額同士を触れ合わせた。

「……悪い、ちよっと嫉妬した」

レンズ越しの目は冗談の欠片もないほど真剣だった。先生も私と同じように、ちゃんとやさきもちを妬いてくれるんだ。ふう、ふうと浅く整えた呼吸の奥で、胸がきゅっと締めつけら

れた。

「……この後は、どうすればいいんだ……？」

先生は決まり悪そうに視線を逸らし、独り言のようにボソリと漏らした。

「えーっ？」

「笑うなよ。本当に慣れてねえんだから……今、保体の教科書必死で思い出してるんだよ」

「ふふ、載ってましたか？」

「避妊の重要性とか同意を取ることの大切さは載ってるけど……具体的に何をどうするかとかは、学校じゃ教えねえんだよ」

頭をかきながら、そんな理屈っぽい言い訳を並べて真っ赤になっている。そんな彼がたまらなく愛おしくて、私は自分のバスローブの襟元にそっと手をかけた。

「じゃあ私の方が詳しいかもしれませんね」

「なんでだ。お前だって、そんな経験……」

「経験はないけど、いーっぱい、予習してきてますから……ほら、せーんせ、服、脱ご？」
灯りを落とすと、部屋の隅に置かれた間接照明だけが、私たちの肌の輪郭を柔らかく照らした。バスローブを脱いで、真っ白なシーツに横たわる。ひやりとした布の感触が素肌に触

れて、ゾクリと小さな震えが背筋を走った。

チラリと先生の姿を伺う。バスローブを脱いだ彼の身体は、彫刻のように美しい筋肉をしていた。広く逞しい肩幅、六つに割れた腹筋、そして服越しでは分からなかった硬く盛り上がった大胸筋。この身体に今から抱かれるのだと想像すると、下腹部の奥がキュンと疼いた。ベッドが大きく沈む。横向きに寝転んだ先生の太い腕が私の背中に回された。探るような指先がブラジャーのホックを捉える。

「……おい、これ、どうなってるんだ？」

困惑したようにちよつと上ずった声に、笑いそうになるのをこらえた。立派な成人男性がこんな小さな金具一つに手こずっている姿は「可愛い」以外の何物でもない。

「内側に、軽く押しながら……ふわつと上に持ち上げると、外せますよ……♡」

節くれだった指がもぞもぞと慎重に動く。やがて、カチツと小さな音がして、胸を締め付けていた拘束が解かれた。

「……できた」

「先生、上手に外せましたね♡」

「……お前、バカにしてるだろ」

「誉めて伸ばすって言うじゃないですか。私、高校の頃先生に褒めてもらえるのすっごく嬉しかったんですよ」

ブツブツ文句を言いながらも、先生の視線は私の胸元から離れなかった。

白く柔らかな曲線、きゅっと尖った淡い色の乳首——「いつか先生に披露するその日」のために、念入りにケアしておいた甲斐があった。

「……触ってもいいか？」

静かに落とされたその低い声が、耳朵をくすぐる。

「もちろん。先生のもんですから」

「お前なあ……そういう煽るようなこと言っていると、あとで後悔するぞ」

「しませんよ。先生は私にひどいことなんてしませんよね？」

にっこりと微笑んでみせると、彼の喉仏が小さく上下した。

分厚い手のひらが乳房に添えられる。もにゅもにゅと指先が優しく動いて、柔らかな感触を確かめるように上下へそつと揺らされると、くすぐったさに、思わず身をよじってしまう。

「……っ、やべえ……やわからか……」

独り言のように呟きながら、先生の親指が乳首の先端をなぞった。ぴくんと肩が跳ねて、

自分でも驚くほど敏感に反応してしまった。

「んっ……♡ ふうっ……♡ んんっ♡」

吐息を漏らすたびに、火照りがじわじわと全身に広がっていく。

先生の指先が、まるで意地悪をするように——それでいて、優しく慈しむように——胸の先端をくるくると円を描いて撫でる。

「すごい……こんなに硬くなるんだな……」

感嘆を含んだ低い声。その熱っぽさに、私の内腿がキュツと震える。脚の間はだんだんと潤み始めていて、今日のために用意してきた可憐な下着をしつとりと湿らせていた。

「先生って……おっぱい、好きなんですねぇ……♡」

上目遣いに彼を覗き込み、わざと熱い吐息を吹きかける。すると先生は、困ったようにわずかに視線を泳がせた。

「……嫌いな男、いないだろ」

「あれ、ノーコメントって言うと思ってたのに」

からかうように微笑めば、彼はしまったと言わんばかりの顔をした。

その初心な反応が愛しくて、私はさらに攻勢をかけた。胸元に視線を誘導するように両腕

で寄せる。

「ねえ……どうですか？　先生。私のおっぱい、好き……？」

先生はあからさまに動揺し、眼鏡の奥の瞳を激しく彷徨させた。噴き出した汗が、彼の端正な横顔を伝い落ちる。そして、先生の脳内で何かがショートしたらしく、次に出た言葉は私の予想を遥かに飛び越えるものだった。

「だ、大胸筋がすっかり発達してて、クーパー靱帯が脂肪をすっかり支えている！　——が、学術的に理想的な——良い、に、乳房、だと、思う！」

なに。なんなんだこの人。

——可愛すぎる！

顔に一気に熱が集まる。ただ「好き」と言われるよりもずっと嬉しいかもしれない。飛びつくように大きな体を抱き締め、厚い胸板に自分の胸を擦り付けると、先生は困惑したように呻いた。

「先生って本当に……先生ですね！」

「……なんだよ、それ」

「大好き、って意味です！」

笑っちゃうくらい真面目で堅物な先生が、私のせいで余裕を失くして、顔を真っ赤にしている。その姿を独り占めしている優越感に、心も——誰にも触らせたことがない部分も、とろとろに溶けていく。ショーツのクロッチはいつの間にか何の意味もないくらいに、ぐじゅぐじゅに濡れそぼっていた。

「先生、こっちも……触ってください……」

大きな手を取って、足の間へと導く。太ももできゅつと挟むと、長い指が一番敏感な場所を刺激して甘い声が漏れた。先生は一瞬息を吞んでから、無言でショーツの中に指を忍び込ませた。

ぬちゅっ♡　ちゅく、ちゅく、ちゅくちゅく……♡

「んうっ、ふ……♡　あっ、そこっ……♡」

「ここか……？」

「そうっ、そうです……♡　せんせ、じょーず……♡」

下着を剥ぎ取られ、私のよりもずっと太い指が一番の弱点である突起を直にくにくにと捏ねる。ぱんぱんに膨れ上がったそこは、指紋のざらつきを感じるほどに敏感になっていて、軽く刺激されているだけなのに悶えてしまう。目線を上にやると、先生は真剣そのものとい

う表情で隠すものがなくなった私のそこを凝視していた。

「やつ！ やだあつ！ 見ないでえ♡」

慌てて足を閉じようとすると、片手で太ももを押さえられる。現役体育教師の力に抗えるはずがなく、見せつけるように大きく開かされる。はしたないほどぐしょぐしょに濡れたそこを見つめる先生は、教師が絶対にしちゃいけない「男の顔」をしていた。

（せんせの目、すごいギラギラしてる……♡ 私の恥ずかしい姿、全部せんせに見られちゃってる……♡）

その視線の熱さが、私の芯を焦がしていく。体の奥からとめどな溢れる蜜を掻き出すように、先生の指の動きはだんだん激しさを増していった。

びちゃ、びちゃ、びちゃ、びちゃ♡ こり、こり、こり♡ ぬちゅっ、ぬちゅっ、
ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ♡♡

「あ、っ、ああつ！ そこ、だめ、そんなんっ、つよしゅぎるううっ♡♡♡」

指先がとろけきった入口をかするたび、逃げ場のない快楽が脳を白く染めていく。それでも先生は、相変わらず黙ったままだ。怒っているかのように眉間にしわを寄せ、口を真一文字に引き結んでいる。ラブホテルの低い天井に私の喘ぎ声が反響する。声を我慢するなんて、

できるわけがない。

「は、つ、あ……う……♡　せんせえ……まって、まって……♡　ずっと黙ってるの、ちよつとこわい……」

熱に浮かされた頭で、先生の広い胸板をそつと叩いて訴えると、彼はハッと我に返ったように顔を上げた。

「……悪い。なんていうか——真剣になりすぎてた」

「その言い方ずるいです……」

「ずるいとかじゃねえよ。必死なんだよ、こっちは」

先生は気まずそうに目を逸らしたけど、私の胸の中に甘い喜びが広がっていた。私を気持ちよくするために、あんなに怖い顔になっていたなんて！　言葉を忘れるほど、私に集中してしてくれたなんて！

「先生、おしゃべりしながら、いちゃいちゃしましょう？」

私から唇を寄せ、軽いキスを繰り返す。返ってくるのは、熱い吐息と重い沈黙。先生は何かを言いたげに口を開いては、困ったように閉じる。その可愛らしい様子を見守りながら、私は先生の言葉を待った。

「何を話せばいいのか、全然分からねえ……」

絞り出された声は、ひどく掠れていた。

「ふふ、思ったことをそのまま言えればいいんじゃないですか？」

「無理だ……頭、真っ白になってんだよ……」

額にうつすらと汗を浮かべ、苦しげに眉を寄せる。あの先生が、私に触れることで頭がいっぱいになって、たった一言を紡ぐのにこんなにも四苦八苦している。その余裕のない姿がたまらなく愛おしくて、私は助け舟をだした。

「それなら……見たものをそのまま言うとか」

私はわざと、彼の視線が釘付けになっている場所——指先でぐっしりと濡れた部分を強調するように腰を揺らした。先生の喉がぐくと鳴る。

「私の体が今どうなってるか……とか。先生が今からどういう触り方をするつもりか……とか……」

「……女って、そういうのが好きなのか？」

「ど、どうなんでしょうね……？ 私……先生に言われたら、嬉しいかも」

本当は、ちよつとどころじゃなく好き。俗にいう「言葉責め」って言うジャンルだ。先生

の低い声で、私のあられもない姿を指摘されたり、これからされることを宣言されたりしたら……そう想像するだけで、足の間がじゅわりと濡れていくのがわかった。

「……分かった。やってみる」

十分すぎるほどの蜜を湛えたそこを押し広げるようにして、節くれだった指が入ってきた。反射的に腹筋に力を入れてキュッと締めると、感嘆したようなため息が先生の口から漏れた。

「……すごく濡れてる」

「はい、濡れてますね」

「濡れてて、熱くて……きつくて……濡れてる」

たどたどしい言葉とともに、太い指がゆっくりと蠢く。笑ってしまうほど不器用な言葉責めだ。けれど、経験のない彼が私のために必死に言葉を探し、喜ばせようと頑張ってくれている。そのひたむきな愛しさがたまらなくて、私の内側は歓喜するようにヒクヒクと震えた。「……なあ、お前、こんなんを感じるのか？」

「先生だからですよ……♡」

分かりやすく困った表情になる先生に、甘い声で微笑みかける。でも、せっかくの初体験

なのだから、もうちょつとムードがあつてもいいかもしれない。「先生の言葉で、もつとえっちなこと言ってみてください♡」と上目遣いでねだってみせる。眉間の皺がさらに深く刻まれてますます困惑した表情を見せたが、やがて何かを覚悟したように「……分かった」と短く吐き出した。

「ここが大陰唇、小陰唇、膣口の奥に膣があつて……」

思わず嘔き出してしまった。背筋を伸ばし、真剣な眼差しで私のそこを見つめていた先生が仏頂面で顔を上げる。

「おい、なんで笑うんだよ」

「わ、笑ってませんよ。続けてください。」

必死に笑いを堪える私の反応をよそに、彼の指先がそつと一番敏感な突起を捉えた。

「陰核亀頭が包皮から露出して。刺激に対して敏感な状態だ。そつと触るから、安心しろよ」

ぬちい……♡

先端を撫でられた瞬間、背筋を鋭い快感が走り抜ける。

「ひあつ……！ やあつ、つ、つよい……♡」

「わ、悪い！　もうちょっと優しく触るから……」

焦ったように呟くと、彼は指先の力をふつと抜いた。今度は羽毛を撫でるような手つきで、指の腹をそつと膨らんだ先端に押し当てる。期待と恐怖でふるふると震えている赤い突起は、優しく円を描くように撫でられることで、さらに大きさと硬さを増していった。

「これくらいの強さなら大丈夫か……？」

私の顔色を伺いながら、先生はおそろおそろ、けれど愛おしそうに指先を動かした。

「んん……♡　はいっ♡　はい、だいじょうぶです……♡」

蕩けた声で答えると、彼は心底ホッとしたように「よかった……」と目尻を下げ、柔らかな微笑みを浮かべた。無防備で優しい表情。不器用な指先が、敏感な粒をやわやわと解きほぐすたびに、胸の奥まで甘く疼き出す。

「高原期に入ってるな」

「えっ……こ、こうげんき……？」

「そうだ、高原期。子宮頸管が開いて粘液分泌が活発化すると膈壁から滲出した血漿成分と混ざって膈分泌液が白く粘り気を増して……」

「せ、せんせえ！　ちよつとストップ！」

たまらず彼の唇を指で塞ぐと、先生は不満そうに眉を寄せた。

「もう分かんねえ……お前は何がしたいんだ……」

「せんせえ……♡ 多分、そういうことじゃないんですよ……♡」

「なんなんだよ、ほんと……」

顔を真っ赤にして頂垂れる先生さんが、可笑しくて、愛おしくて。この真面目すぎる唇から、もつと恥ずかしくて淫らな言葉がこぼれるのを聞いてみたい。そんな好奇心が芽生えた。

「もう……♡ じゃあ、私が教えてあげますね」

大きく脚を広げ、両手の指をひくひくと淫らに震える入り口に引っかける。左右に大きく割り開くと、空気に晒された秘肉がぬぷりと粘つく音を立てて、真っ赤な内側が露わになる。

「ここは膣じゃないです。えっちの時にそんな呼び方する人、いませんよ……♡ ここはあ……まんこ、って呼ぶんですよ♡ まーんこ♡」

ぱくぱくと冗談めかした手付きでそこを開いたり閉じたりする。普段絶対にしない恥ずかしい言葉を口にするたび、背筋をゾクゾクとした快感が這い上がってくる。私は先生の太ももの奥にちらりと目線を送った。グレーの下着を大きく押し上げて、輪郭が露になっている。「それで、先生の方のおつきくてかたあくなってるのは、ちんぽ♡ 陰茎とか難しいこと言

わないでくださいね？　ちーんーぽ、です♡」

語尾に蜜を纏わせるように囁くと、先生の顔は沸騰したみたいに真っ赤に染まった。ハアハアと荒い呼吸が眼鏡を曇らせている。その余裕のなさが、たまらなく愛おしくて、もっともっとと乱れているところを見たくなった。

じゅぶじゅぶと奥から溢れ出した愛液が内腿を伝ってお尻の方まで垂れている。きっとシートにも、いやらしい染みができてしまっているだろう。

「お前、なあっ……!!」

「せんせ、ほらほら言ってみてください……♡　ま・ん・こ♡　ち・ん・ぽ♡　私のまんこ、先生のちんぽが欲しくてもうこんなにくしょくしょくなんですよ……♡」

「あの子——知ってんだよ」

一瞬だった。気づいた時にはベッドに組み敷かれ、中に侵入した指がおなか側の一点を強く叩いた。

「——っ、あっ!?　……え？」

衝撃に、背中が弓なりに跳ねる。けれど、彼は逃げることを許さない。空いた手で私の両手首を頭上へ押さえつけ、逃げ場を完全に塞いだ。

「随分バカにしてくれたなあ？ 童貞からかうのは楽しかったか？」

「えっ、えっ……だって、せんせ……知らない、かと思って……」

「知ってるに決まってるだろ。お前、俺のことなんだと思ってるんだ」

ゾクゾクするほど低い声に身震いすると、中に深く沈んだ指が弱点を探り当てて、一か所を執拗に押し潰しはじめた。

「で、ここはなんていうんだっけ？」

「あ、あう……♡」

「授業では『膣』って教えてるけど、星野はなんて呼んでるんだ？」

指が二本に増やされ、粘膜を内側から強引に押し広げる。中指と薬指がバラバラに蠢いたかと思うと、私自身さえ知らなかった急所を左右から挟みこんで揺らし始めた。

「質問にはちゃんと答えろよ、この、ぐちゃぐちゃに濡れている部位の名称は？」

「ひあっ♡ まんこ♡ まんこですっ♡」

「よく言えたな。じゃあ、その『まんこ』がどうしてこんなにマン汁を出して、俺の指をギチギチに咥え込んでるのか、お前の言葉で詳しく説明してみろ」

「あ、う、ああっ♡ やだっ♡ やだあっ♡ ごめんなさいいいっ♡♡♡」

あまりの激しさに首を横に振ると、『ごめんなさい』じゃねえよ」と小さな突起をピンと弾かれた。

「陰核もビンビンに勃起してるなあ。ああ、悪い。お前はきつと違う呼び方をするよな。なんて呼ぶんだ？ クリ？ クリちゃん？ それとも淫乱よわわクリちんぽか？」

「ひ、あ、っ、んんうっ！」

「答えろよ。言わないと、ここ、潰れるまで弄るぞ」

親指が痛々しいほど腫れあがった先端を捉えた。指の腹でくにくにと左右に転がされるたび、鋭い刺激が全身を襲う。ぬるぬると滑って指から逃れようとするそこを、彼は逃がさない。グッと圧をかけるように押し潰し、ぐりぐりと執拗に肉をこね回した。

「あっ♡♡♡ クリ♡♡♡ クリですうっ♡♡♡」

「はい、よく言えました。じゃあ、ご褒美にまんことクリの両方やってやるよ」

おまんこをぐちゃぐちゃに掻き回されながら、爪の先でカリカリとクリを引っ掻かれる。くちゅ、ぬちゅ、と粘り気のある音が部屋に響き、私の頭は真っ白に染まっていく。その間も、中の指は絶え間なく抜き差しを繰り返し、ついには最奥の行き止まりをコツコツと叩き始めた。

「あっ♡ せんせ♡ むり♡ もうむりいっ♡ イきそうなのおっ♡」

「イけよ。イけ、イけ、デカイ声出してイっつけ……♡」

「ああ♡ ふっ♡ んおお♡ んお、おっ♡ おおっ♡♡♡ イく、イクイクッ♡ ぐっ
ちゃっ……♡♡♡」

クリを表と裏から挟んでこすり上げられた瞬間、視界はチカチカと明滅し、抗いのような快感が脳天を突き抜けた。腰が浮いたまま太腿がガクガクと痙攣し、やがて、一気に力が抜けて尻もちをつくようにベッドに倒れ込んだ。ぐったり沈み込んだまま、天井を仰ぐ。息を整えようとするたび、胸が大きく上下して、自分がどれほど深いところに連れていかれたのかを思い知らされた。

「どうだった？」

すぐ隣から、低くて落ち着いた声が降ってきた。

先生はの息は整っていて、いつもの冷静さを取り戻しているように見えたけれど、レンズの向こうの瞳にはまだ隠しきれない熱情が炎のように揺らめいていた。

「きもちよかったです……」

「それはよかった。じゃあ、シャワー浴びて寝るぞ」

「終わりなんですか!？」

なんで!? まだ、前戯だよね!? 思わずバツと上体を起こす。ぽかんとしている私に、先生は少し困ったような顔で肩をすくめた。

「終わりだよ。お前、イッたから満足しただろ? 第一コンドームがないし」

「そこにあるじゃないですか」

私はサイドボードを指差した。そこに置いてある小さなかごにゴムが入っていることは、先生がシャワーを浴びている間に確認してある。

先生は頭を切り替えるように一度息を吐いてから、諭すような声を作った。

「こういう所のゴムは悪戯で穴が開いていることがあるからな。気をつけろって生徒に指導してるんだよ」

どこまで真面目なの! 喉元まで出かった叫びをぐっと飲み込んだ。呆れそうになるけれど、その慎重さも、融通の利かなさも、全部ひっくるめて好きだから。それに、そう言い出すだろうということは、想定済みだ。

ベッドから降りて、脱いだ服と一緒にまとめて置いた鞆へ手を伸ばす。底のほうに指を差し入れ、慣れた感触を確かめてから、箱を取り出した。先生の婚約者になってから、ずっと、

使うかどうかともわからないまま、「いつか」のために忍ばせてきたものだ。

「コンドームなら、ありますよ」

ベッドに戻り、先生の脚をまたいでシーツの上に膝をつく。先程あっけなく絶頂へと連れていかれたばかりの身体は、まだ熱を帯びている。ぬかるんだその場所が先生の硬い太もものに触れないように腰を浮かせているけれど、顔を少し下げればてらと光った淫らな痕跡が見えてしまうのはかえっていやらしいかもしれない。

「先生と一緒に、気持ちよくなりたいです」

先生の顔を見上げると、普段は冷静な瞳が私の身体をまっすぐに見据えていた。唇がわずかに開き、言葉を失っているようだった。

よかった。ドキドキしてるのは私だけじゃない。コンドームを持っていない方の手で真っ赤に染まった頬を撫でると、大きな体がビクリと跳ねた。

そっと手を伸ばし、先生の太ももの奥に触れる。先程はあんなに下着の中心を押し上げていたそこは、少し昂ぶりが収まった様子で、ほんの少しの硬さを残してふんにやりと柔らかくなっていた。不思議に思って首を傾げると、「悪い、ちょっと緊張してる」と決まり悪そうに視線を逸らされた。